

日本再発見塾 in 高島



弓	弓	丹	由	田	冂	田
え	え	じ	ゃ	な	い	か

～ 日本を学び、日本を遊ぶ～

第二回日本再発見塾 in 高島 報告書

目次

「日本再発見塾要旨」	3
「高島市について」	4
「当日タイムスケジュール」	6
「当日の様子」	
一日目	8
二日目	17
「アンケート結果」	21

日本再発見塾要旨

日本は今、大きな曲がり角を迎えています。政治や経済の世界では様々な「改革」が進行中ですが、強調されているのは効率や競争力、経済的利益、グローバル化などばかり。大企業や大都市、インターネットビジネスなどは元気になっていますが、他に目を向けるとどうでしょうか。

地方都市、田舎、地場産業、農林漁業、職人の技、伝統芸能。それらと密接に関わっている人と人の付き合い方や伝統行事。私たち日本人が歴史の中で創り上げてきたものが今、軽視され、力を失っています。その結果、産業も町並みも私たちの生活も画一化し、潤いをなくし、文化や芸術も勢いを失っているのではないのでしょうか。

日本は、もっと魅力的な国ではなかったか。私たちは、私たちの地域が持っている魅力を見失いがちではないだろうか。それを取り戻すために、私たちにできることが、あるのではないか。

こうした思いを抱く様々な分野のトップランナーら 40 人が集まり、立ち上げたのが「日本再発見塾」です。

近年、日本各地で住民が地元の「宝物」を磨き直し、広く発信していく「地域おこし」の動きが始まっています。そのような町や村に対して、私たちは思いを共有する仲間たちそれぞれの技能、行動、ネットワークによって、お手伝いをしたいと思います。同時に、その土地に根ざした「宝物」に触れ、日本の文化と伝統を考え直すきっかけをつくりたいのです。そして、そこから日本の津々浦々で同様の動きが広がっていけば、日本は今よりずっと元気で、楽しく、また外国からも敬意を払われる国になるのではないのでしょうか。海外で言われる「ジャパン・クール」の名に恥じない日本にしたいのです。

こうした思いが生んだ第1回日本再発見塾は、2005年に岩手県葛巻町で開かれました。典型的な過疎地だった葛巻町は、地域の特性を活かして酪農や風力発電などに力を入れ、昔の水車小屋や蕎麦畑を住民自らの手で蘇らせて「村おこし」に着手。豊かな自然を背景に開催した俳句の会には全国の老若男女 1 万人から応募があるなど、地元の人も驚くスピードで、地域の魅力の「再発見」が進んでいます。宮大工などの「地元達人」、スタッフ、そして 120 人の受講生が集まった第1回日本再発見塾は大好評で、以後も葛巻町では地域活性化の試みがさらに前進しています。

そして、第2回の舞台は滋賀県高島市。高島市は、「万葉集」に地名が残るほど長い歴史を持ち、古くから山林や樹木との共生の文化を育んできた土地柄。様々な意味で日本のルーツに関わる「物」「技」「文化」の宝庫です。今日からの2日間、この地で私たちの日本を発見し、自分を発見しようではありませんか。

高島市について

町の誇り、「生水(湧き水)」と「川端」のある生活

琵琶湖の西側にある高島市針江区。この地区には「かばた」とよばれる独特の文化がある。このあたりは琵琶湖からの地下水が豊富で、15~20メートルくらい掘ると湧き水による井戸が出来る。この湧き水を家の中に引き入れたり、川のそばに井戸を作ったりしたため「川端」から「かばた」となった。「かばた」の湧き水は飲み水であり、野菜や果物を冷やしたり、茶碗を洗ったりもする。その際の茶碗に付いたご飯粒を食べてくれるフナや鯉を井戸や川に飼っている。米のとき汁も微生物が分解してくれるという。人間が出すごみも自然のリサイクルの一環となっている。かばたとともに暮らす針江の周辺を歩きながら、参加者はその感動を俳句に詠んだ。

さらに上流の人が汚物を流しては下流の人が安心して川の水を使うことが出来なくなる。だから川には決して汚いものは流さない。この水を大切に作る精神が近所付き合いにもなっている。湧き水は針江に暮らす人たちにとって、まさに生きるための水「生水(しょうず)」なのだ。

ここには自然とともに生きてきた琵琶湖周辺の人たちの暮らしが昔のまま息づいている。少しずつではあるが観光客も訪れる。住民たちがボランティアで案内役を勤めている。こういった活動も含め文化的な財産の存続と他地区の人たちとの交流を通じた地域の活性化を推進した事に、「美の里コンクール」の受賞理由が有る。

「美の里づくりコンクール」とは、農林水産省、オーライニッポン、(財)農村開発企画委員会によって、国民共通の財産である美しい、農山漁村を守り、育て、次の世代に継承していくために、地域の創意工夫を活かした農山漁村の景観づくりの優れた取組事例を表彰し、これら農山漁村の美しい景観とその保全・形成の取組を全国に広めていきたいという趣旨の元に開催され、今年初旬に第一美の里コンクールで高島市針江区が受賞した。このような素晴らしい環境と積極的な自治的な姿勢に共鳴し、日本再発見塾の第二回開催地に決定した。

上記の様子をNHKが「里山 命巡る水辺」として放映したことで、針江を訪れる人が急激に増えた。そこで針江区が先頭にたって住民から有志を募り、2004年5月に「針江生水の郷委員会」を設立して訪問客や自治体・環境団体等の案内、マスコミ取材に対応している。このような対応に加え、藻刈りなどの地域環境保全行事をイベント化したり、空き家となった川端のある家を滞在型宿泊施設にするなど、文化的財産の存続と他地区の人たちとの交流を通じた地域の活性化を推進している。

濃く色残る日本文化

高島市には針江だけでなく、朽木村という歴史的な村がある。朽木が歴史の門戸に顔をのぞかせるのは、おおよそ1000年前。古くは「朽木谷」または同義で「朽木郷」「朽木杣(くつきそま)」と呼ばれてきた。「朽木庄」の呼び名もあるが、平安時代に見える「朽木荘」が荘園名として比較的長い歴史を持つ。

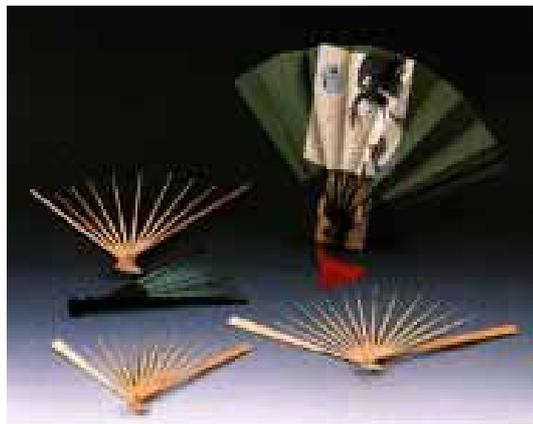
奈良時代、朽木谷から「朽木の杣」、すなわち材木を東大寺の建築用材として筏で搬出した記録が残っている。安曇川からびわ湖を経て、淀川、木津川とわたり、奈良坂を越えて運ばれたもの。

貝原益軒の「諸国めぐり」に、朽木の杣は朽木谷の奥にあり、名所なり云々...とあるように朽木谷一帯は名木の産地として古くから盛名をはせていた。因みに、朽木の名は古事記にある「木神久々能智神」を祭祀した故から生じた「久々」が変化したもので、「樹木繁茂の地」の意があると言う。

しかし、一方で朽木を有名にしたのは戦国期、この地に地頭の朽木氏が室町幕府の十二代將軍義晴、十三代將軍義藤を匿い、政務を補佐した故事によるところも大きい。そのロマンは今も、村内の禅寺等で、垣間見ることができて興味深い。

高島にまつわる民話、舌きりスズメ

高島市には日本文化や原風景が残っている。そのためか、民話も多く、有名な舌きりスズメもそのひとつだ。旧高島町が舞台で、竹藪の中にスズメのお宿があった旧高島町から旧安曇川町にかけては竹藪も多く、安曇川流域では豊富な竹を利用して扇の骨(扇骨)が古くから生産されていた。それはいまま変わらず、高島扇骨として全国シェアの約9割を占めている。



当日タイムスケジュール

6月3日(土)

時間	内容
11:30	安曇川駅集合、バスで移動
12:00	開講式(於:藤樹書院) 開講の辞 学生実行委員長 市原寛之 歓迎挨拶 高島市長 海東英和 事業の趣旨及び講師陣の紹介 呼びかけ人代表 俳人 黛まどか師範 協賛企業等のご紹介
12:30	ストレッチ:講師 - 増田明美氏
12:45	移動、昼食
14:00	吟行:講師 - 黛まどか氏(於:針江地区) ジョギング吟行 - 増田明美氏
15:15	休憩
15:30	第1講:「究極の普通」(於:正傳寺) 講師 全員参加 司会 海東英和市長

	地元達人 北野良昭氏(正傳寺住職)福田千代子氏 田中久美子氏(生水の郷委員会所属)
16:50	移動
17:30	夕食(於:朽木スキー場)
18:45	チェックイン、休憩(於:グリーンパーク想い出の森)
20:00	念仏踊り(朽木針畑郷の皆さん)+篠笛(八木繁氏) Wサプライズ企画 (於:興聖寺) デジタル掛け軸 長谷川章氏
20:30	夜話 礼・きまり 小川後楽師範 地元達人:淵田隆雄氏 石田弘子氏 琵琶湖 高橋世織師範 地元達人:北村眞一氏 藤田弥壽三氏 住まい 小川三夫師範 高橋裕博講師 地元達人:栗本慶一氏 食べ物 藤原誠太師範 地元達人:松原勲氏 西澤恵美子氏 遊び 麴谷宏師範 茂木健一郎師範 黛まどか師範 地元達人:青木繁氏
21:30	日本舞踊(藤間信之輔氏) 琴演奏(榎戸二幸氏)
22:30	宿舎到着

6月4日(日)

時間	内容
7:30	朝食
8:30	朝市見学(於:朽木新本陣)
9:30	Wサプライズ企画 お茶を楽しむ会(於:興聖寺) 煎茶 小川後楽氏
10:30	第2講:「無駄と効率」 講師:小川後楽師範、小川三夫師範、金剛永謹師範、麴谷宏師範、高橋世織師範、長谷川章師範、藤原誠太師範、黛まどか師範、茂木健一郎師範 地元達人:森泰翁氏(興聖寺住職)、藤野雲平氏(筆師) 村田高弘氏(扇子工業組合)
12:30	昼食
14:00	第3講:「高島再発見 日本再発見」 講師:小川後楽師範、金剛永謹師範、麴谷宏師範、高橋世織師範、長谷川章師範、藤原誠太師範、黛まどか師範、茂木健一郎師範、 地元達人:森泰翁氏(興聖寺住職)、藤野雲平氏(筆師)、村田高弘氏(扇子工業組合)
15:30	閉講式 修了証授与 吟行各賞発表・表彰 挨拶 地元実行委員長 永谷武久 看板贈呈 修了の宣言 呼びかけ人代表 俳人 黛まどか師範
16:30	解散(バスで安曇川駅へ)

講師

多様なジャンルのトップランナーが日本再発見塾のために参加してくださいました。

小川 後楽	小川流煎茶六世家元
小川 三夫	宮大工・鶴工舎 舎主
麹谷 宏	デザイナー
金剛 永謹	金剛流 26 世宗家
高橋 世織	国文学者
長谷川 章	デジタルアーティスト
藤原 誠太	養蜂家
増田 明美	スポーツジャーナリスト
茂木 健一郎	脳科学者
黛 まどか	俳人

ゲスト講師

榎戸 二幸	琴奏者
八木 繁	漆塗師業・篠笛奏者
高橋 裕博	染職人

地元達人

北野 良昭	正傳寺住職
森田 茂	針江生水の郷委員会メンバー
田中 久美子	針江生水の郷委員会メンバー
福田 千代子	針江生水の郷委員会メンバー
西澤 恵美子	山菜農園「じゅうべえ」代表
栗本 慶一	栗本林業代表
北村 眞一	喜多品老舗店主
青木 繁	グリーンウォーカークラブ代表取締役
藤野 雲平	筆師十五世
淵田 隆雄	藤樹書院の案内人
森 泰翁	興聖寺住職
村田 高弘	滋賀県扇子工業協同組合理事
松原 勲	猟師
石田 弘子	郷土史家
藤田 弥壽三	元小学校長

当日の様子

一日目

午前11時過ぎ頃、JR 安曇川駅に参加者がぞくぞくと集合してきた。11時30分から本格的に受付が始まり、受付を終えた参加者から、駅に停車していたバスに乗り込んでいく。一行が乗ったバスは、藤樹書院へ向かい、そのまま開講式に臨んだ。

開講式次第

開講の辞 学生実行委員長 市原寛之

歓迎挨拶 高島市長 海東英和

事業の趣旨及び講師陣の紹介 呼びかけ人代表 俳人 黛まどか師範

協賛企業等のご紹介

参加者を優美なオカリナ演奏で迎える奥野平氏



海東市長の挨拶



開校式に集まった人々

ストレッチ: 講師 増田明美師範

開校式に続いて、準備体操に入った。これからの吟行・講義に向けてしっかりと準備体操を行うことが大切。増田師範によるストレッチ体操で、参加者・講師・スタッフ一同、身も心も軽くなり、講義に向けて準備が整う。

増田明美師範による体操



しっかり準備体操をする参加者



講師・スタッフ一同(挨拶は黛師範)

散策・移動

体操を終えた参加者は、藤樹書院周辺の散策を兼ねながら昼食会場（道の駅）へと徒歩で向かう。ただバスで目的地に移動するのではなく、プログラム内随所に「散策」を入れることで、高島の自然を堪能してもらうことを目的としている。

< 高島の自然 >



散策する参加者

吟行

地元食材にこだわった昼食を堪能したあとは、いよいよプログラムが本格的に始動。吟行では、黛まどか師範を中心に高島市針江地区を散策した。

針江地区には、琵琶湖と行き来をしているハリヨ（五里）が住みついている集落中に大小の水路が張り巡らされており、それら水路を流れる全てが自噴の湧き水（しょうず）である。この水源はすべてに源を発する安曇川の伏流水で、村のいたるところから湧き出ている。水路の至る所には緑鮮やかな梅花藻が自生し、残飯や藻を食べて水を浄化してくれるとともに、心にやすらぎを与える愛玩動物として鴨や稚鮎、鯉が泳いでいる。多くの家では湧き水を生活用水として利用した「川端（かばた）」と呼ばれる井戸端があり、透き通った水を引いて野菜や果物を洗ったり冷やしたりしている。（受講の手引き参照）



日本でここしか見られないという「川端(かばた)」。古くから受け継がれてきた生活の知恵が今でも根付いている。「リサイクル」「省エネ」が叫ばれている今、本来あるべき水の循環サイクルが、ここでは生活の一部となっていた。

(写真は川端の様子)

吟行の合間には、地元の方々のお話が聞けるようになっており、参加者は各々に地元の方とコミュニケーションを取っており、普段とは違った「日常」を味わった。それらの話を元に、参加者は各々感じ取ったことを俳句にしていった。



吟行散策コースの途中には、サプライズとして、100年以上も続いている地元のお豆腐屋さんからお豆腐の試食やお茶が配られた。「本当にきれいな水を使ったお豆腐は、普段食べているお豆腐と全然違う。大豆の味わいが深い。」という声が沢山聞かれた。地元の方々による粋な計らいが、参加者を満足させる。

ジョギング吟行

黛まどか師範と吟行をする一行とは別に、体力が余っている参加者は増田明美師範と共に「ジョギング吟行」を行った。針江地区をジョギングしながら吟行をするという、当塾ならではの企画。途中からは地元の子どもたち30人ほども参加し、最後は皆さん大汗をかきながらゴールした。

増田師範と地元の子ども達



第一講「究極の普通」

吟行が終わったあと、その後正傳寺(しょうでんじ)に移動し第一講が始まった。

霊薬山正傳寺は保延年間の草創と伝えられているが、慶長15年(1610)、永平寺十九世祚球禅師を請じて曹洞宗に改宗したので祚球を開山としている。それより、永平寺直末中本寺格として、近江三ヶ寺の一つとなった。寺内に薬師堂がある。縁起文によれば、昔伝教大師三体の薬師如来を刻み、一体は叡山中堂に、二体は湖中に投ぜられたが、その中の一体は湖東にとどまり後、東叡山寛永寺にあり、他の一体が霊亀に乗り、境内の放生池から上られ、当時、土蔵右京亮正信の寄付により一宇を建立して安置したと伝えられる。当寺の山号「霊薬山」はこの縁起によるものである。(受講の手引き参照)

「究極の普通」

講師 全員参加 司会 海東英和市長

地元達人 北野良昭氏(正傳寺住職) 福田千代子氏 田中久美子氏(生水の郷委員会所属)

究極の普通とは何か、何気なく見過ごされている「普通の生活」を講師の方を中心に再考。



講義の様子



真剣に聞き入る参加者たち

夕食@朽木スキー場

第一講が終了し、朽木スキー場へ移動。スキー場へ到着するや否や、地元の朽木青年団による「朽木太鼓」に迎えられ、サプライズ。演奏終了後、参加者は食事会場へと向かう。地元の食材をふんだんに使った食事(大皿料理)に舌鼓を打ちながら、参加者同士の交流が進んでいく。初めはぎこちなかった会話も、夕食時には各々の身の上話で盛り上がっているようだった。

デジタルカケジク(長谷川章師範プロデュース)

朽木スキー場で地元食材を堪能した後は、ホテルに戻り荷物を置き、第二講が行われる「興聖寺」にバスで移動。ここでは、長谷川章師範によるデジタルカケジクが参加者を出迎える。今まで見たことのない、デジタルと和の融合。恐らく言葉では表現できないような世界観が広がる。

デジタルカケジクによって時々刻々と姿を変える興聖寺





荘厳なデジタルカケジクを前にし、滋賀県知事國松善次氏によるご挨拶を頂戴した。また、興聖寺をバックに八木繁氏による篠笛演奏に合わせて、藤間信乃輔氏による日本舞踊が披露された。正に「和」を感じると共に、現代の象徴である「デジタル」とのコラボレーションが何とも言えない独特の雰囲気を出し、息を吞んで演奏に夢中になった。また、朽木針畑郷の皆さんによる「六斎念仏踊り」も披露され、郷愁の匂いを感じた。帰り際にも、榎戸二幸氏による琴演奏が披露され、音楽尽くしの夜話となった。



篠笛と日本舞踊



六斎念仏踊り

夜話

礼・きまり	小川後楽師範	地元達人: 淵田隆雄氏	石田弘子氏	
琵琶湖	高橋世織師範	地元達人: 北村眞一氏	藤田弥壽三氏	
住まい	小川三夫師範	高橋裕博講師	地元達人: 栗本慶一氏	
食べ物	藤原誠太師範	地元達人: 松原勲氏	西澤恵美子氏	
遊び	麹谷宏師範	茂木健一郎師範	黛まどか師範	地元達人: 青木繁氏

以上の五項目のテーマに講師の方々が分かれて、参加者は話を聞きたい講師を円座で囲む。参加者が一番講師の方と一番近くで話ができるということで、参加者の興味を最もひく企画の一つであったとも言える。思い思いに参加者が講師陣に対して疑問をぶつけていたようだった。



夜話の様子(琵琶湖)



高橋世織師範



熱弁をふるう茂木健一郎師範



夜話の様子(遊び)



黛まどか師範



蜂のことになる目が変わる藤原師範



麹谷宏師範

「話す時間が足りない」「講師の話をもっと聞きたかった」という参加者の声が聞かれる中、夜話は好評のうちに終わった。各々は、宿舎に帰っていった。

当塾では、「相部屋」という制度を導入しているため、初めて会った人々と一夜を共にしなければならない。もちろん、最初はぎこちないかもしれないが、一晩立ってみるとなによりやらかな雰囲気スタッフが伝わってくる。これも当塾ならではの交流システムだろう。

二日目

朝市見学

地元食材にこだわった朝食を取った後は、朽木新本陣にある朽木日曜朝市見学へ行った。台風
の直撃によって国道が寸断され、一時期活気を失っていたとは思えないほどの人出で、地元でし
か取れない食材や伝統工芸品が所狭ましと並んでいた。売り手の方も、自慢の品々を活気よく販
売していた。

朝市の様子



朝市見学終了後、一日目の夜の会場となった興聖寺へ、散策をかねて徒歩で向かう。



興聖寺から眺める景色



道端にいた蛇

サプライズ企画 お茶を楽しむ会

一日目の夜とは違ってかわって、昼間の顔を見せる興聖寺。参加者の皆さんには当日サプライズとして、小川後楽師範による煎茶を味わうこととなった。「煎茶」は誰もが知っているが、本当の「煎茶」を知っている人は極少数だろう。普段の煎茶とは違い、量は非常に少ないが、味が凝縮されており、今まで味わったことのない濃厚で深い味わいのあるお茶に、参加者、講師、スタッフ一同驚きながら味わった。



講義を行う小川後楽師範



煎茶のお手前を披露するお弟子さん



熱弁される小川師範



煎茶を楽しむ講師たち

第二講「無駄と効率」

無駄とは何か、効率とは何か。全員で討論しその本質を追究した。

講師：小川後楽師範、金剛永謹師範、長谷川章師範、黛まどか師範、茂木健一郎師範
地元達人：森泰翁氏(興聖寺住職)、藤野雲平氏(筆師)、村田高弘氏(扇子工業組合)



第三講「日本再発見」～高島再発見～

2日間の経験を通して、講師、達人のそれぞれが高島の魅力の再発見を語り、ひいては私たちの暮らし、日本文化の再発見を考えた。

全体討論

講師：全員参加

ファシリテーター：加藤秀樹



修了式

修了証授与

吟行各賞発表・表彰

挨拶 地元実行委員長 永谷武久

看板贈呈

修了の宣言 呼びかけ人代表 俳人 黛まどか師範

看板贈呈の様子

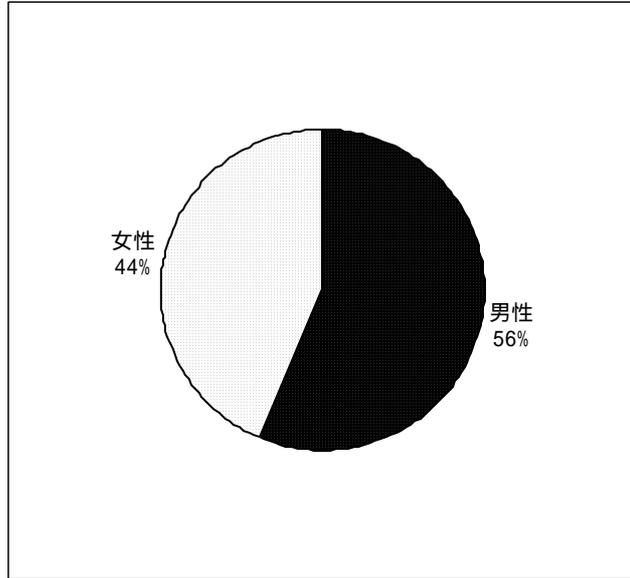


スタッフ一同

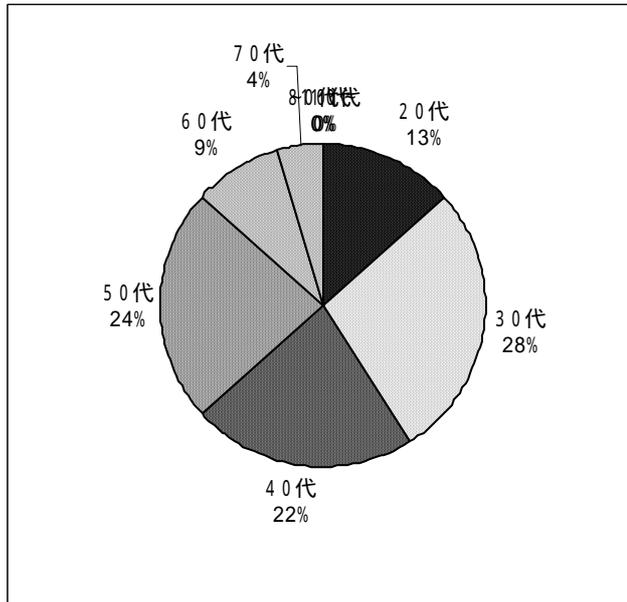
参加者・講師・スタッフ、様々な思いを胸に帰路につく。

1、< 参加者状況 >

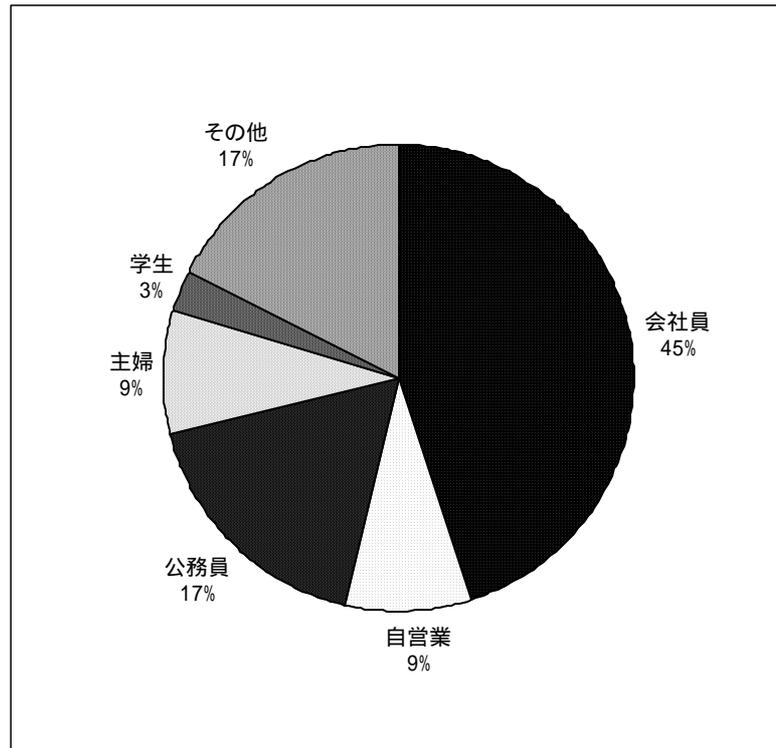
参加者性別



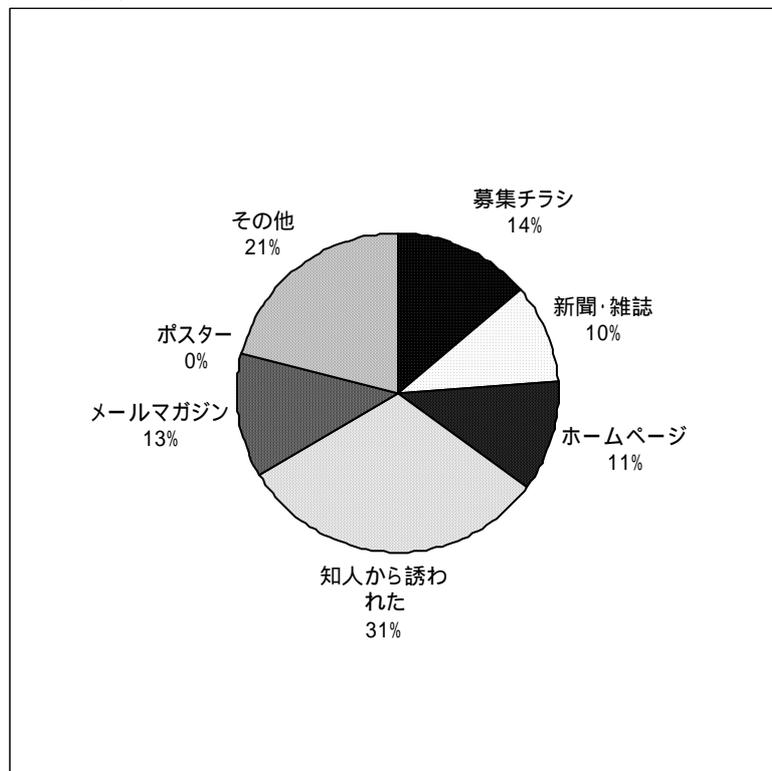
参加者年齢分布



参加者職業



日本再発見塾を知ったきっかけ



その他の内容

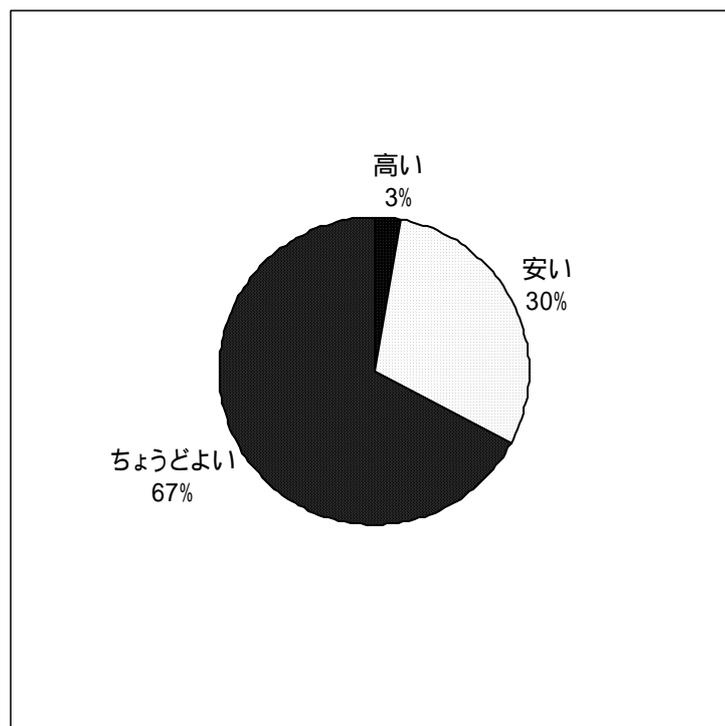
- ・ J.I. フォーラムでお会いした方からの薦め
- ・ ラジオ
- ・ メール(第一回に参加していたため)
- ・ クオリア日記(茂木健一郎氏のブログ)
- ・ 黛まどかさんの HP を見て
- ・ おしゃれ吟行会
- ・ 会社からの薦め

どうして参加しようと思ったか

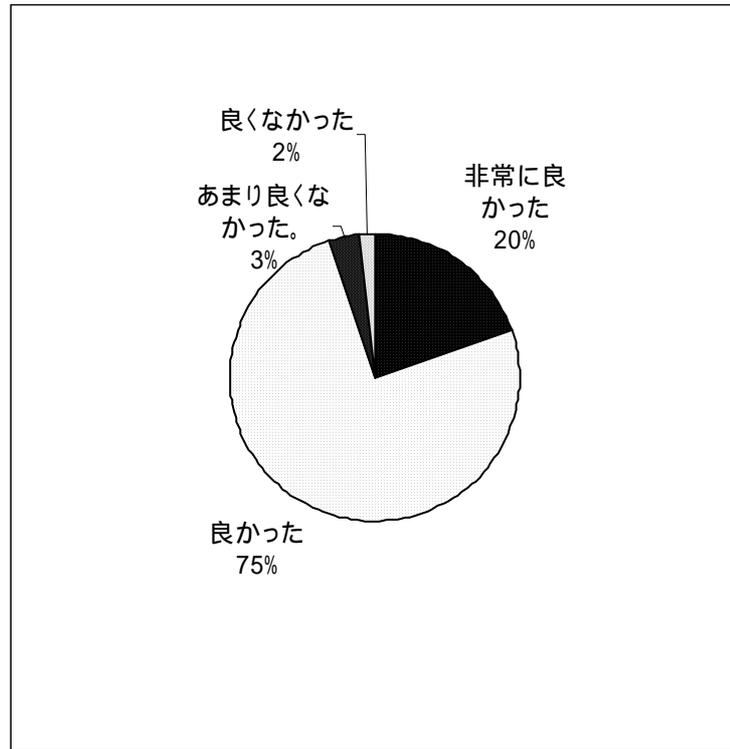
- ・ 各界のトップランナーとして活躍されている講師の方々の話を聞いてみたかったから。
(30代/男性/自営業、同様のご意見多数あり)
- ・ 滋賀県高島市という町に興味を持った。自分自身を見つめ直したかったから。
(50代/女性/主婦、同様の意見多数あり)
- ・ 今、日本では「改革」が声高に叫ばれており、効率の悪いもの、ひいては過疎地域が忘れられようとしている。改革だけが「善」ではないということを考えるため。
(30代/男性/公務員)
- ・ 海外勤務時代に、自分は「日本」について知らなすぎる、と自覚したため。
(30代/男性/会社員)
- ・ 自分の問題意識に共鳴するものを感じたから。
(30代/男性/会社員)
- ・ 運営方法や体制を勉強するため。
(40代/男性/公務員)

2、参加者のご意見

料金設定

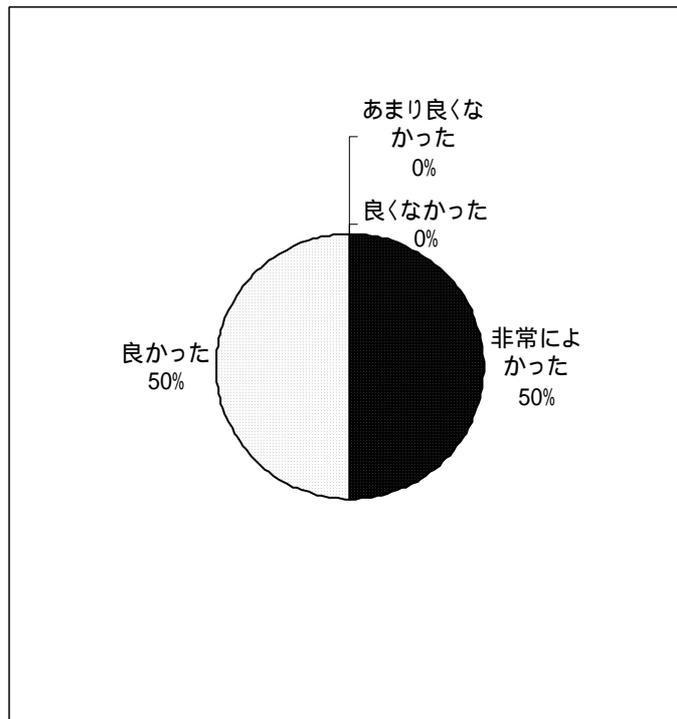


受講の手引き

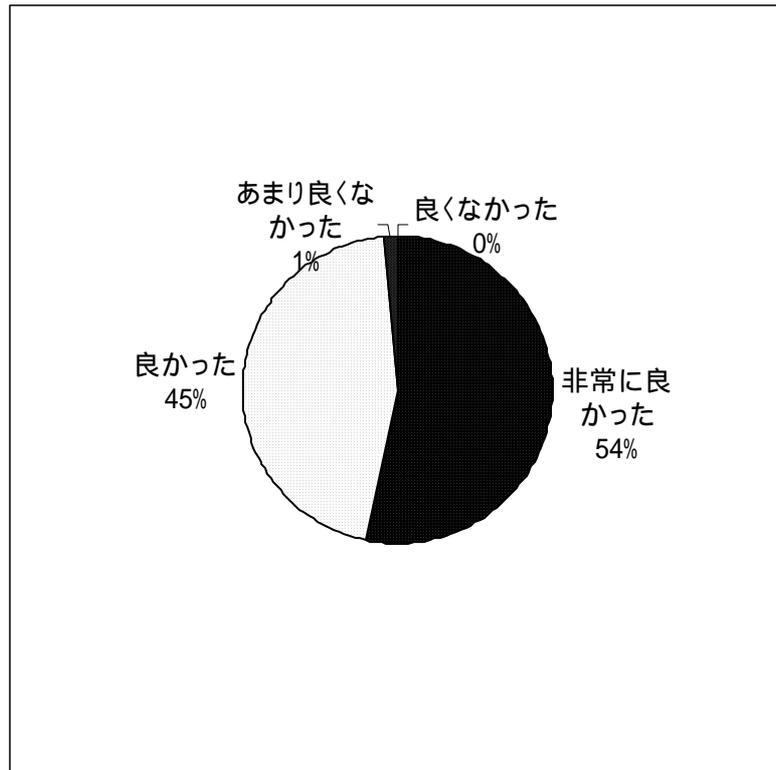


- ・メモ欄があって使いやすかった。
(40代 / 女性 / 公務員)
- ・移動している土地感覚をつかむため、地図があった方がいい。
(30代 / 女性 / 会社員)
- ・講師陣のHPのURLを掲載して欲しい。
(50代 / 男性 / 会社員)
- ・もう少し小さいサイズの方が使いやすいと思う。
(40代 / 女性 / 公務員)

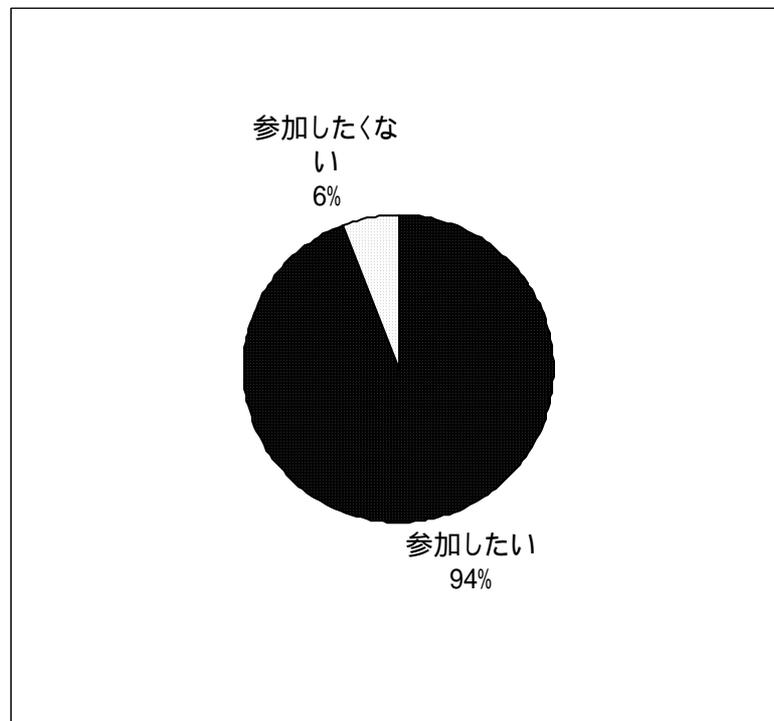
会場



内容



次回も参加したいか



3、全体を通して参加者からの感想

・ボランティアでこのような企画をやろうとしている人達がいるということに感激した。日本の風土に根ざした文化や生きがいはまだ残っている様を見てほっと安心した。スタッフが一生懸命にこの企画に取り組んでいる様子が伝わってきた。

(50代 / 女性 / 会社員)

・食事に地元の特産品が使われており、とてもよかった。

(40代 / 女性 / 会社員)

・高島市に日本の歴史・伝統を守っていくことの大切さ知った。時の流れの中に無駄なこともいっぱいあるけど実はそれがなかったら「伝える」ということが続かなかったかもしれない。心にも無駄というゆとりが必要であるとわかった。

(40代 / 女性 / 自営業)

・参加者も含めて作り上げていくというのが良かったと思う。

(40代 / 男性 / 公務員)

4、全体を通して参加者からの指摘

時間管理に関して

・夜話は内容に関しては濃かったのだが、時間が短かった。

(20代 / 女性 / 会社員、同様の意見多数)

・全体を通して、講義やバス移動などのスケジュールを詰めすぎている。もっとスケジュールに余裕を持たせるべき。

(30代 / 男性 / 会社員、同様の意見多数)

講義内容に関して

・もっと地元の人々の日常の暮らしを聞きたかった。生活者の視点があまり感じられなかった。

(30代 / 男性 / 会社員、同様の意見多数)

・自然の中を散策したり、体を動かしたりするプログラムが二日目にもあったら良かった。

(20代 / 女性 / 会社員)

・講師と参加者、参加者同士の交流の機会があったら良かった。

(40代 / 男性 / 会社員)

その他

・講義中、あぐらの時間が長いため足の痛みを訴える方がいた。

(30代 / 男性)

・運営を手伝っていた学生の実行委員は自分たちのイベントの内容をもう少し勉強した方がいい。

(20代 / 男性 / 学生)